

2019年2月24日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「主の祈り」

聖書：マタイによる福音書6:9～13

第二次大戦中、青山学院大学のある教授が、戦争批判の平和的発言を繰り返したことから、国家・社会に対する批判精神に当たるとして検挙され、投獄させられた。暗く冷え切った独房に入れられて虚しさと不安と空腹の中にあった。そんな中、最後まで支えであったのは、教会で覚えた「主の祈り」だったという。無意識に唇から涙と共にこぼれてきたという。

神学者ティーリケは、主の祈りは「世界を包む祈り」と言っている。「我らの父よ」と言う時の「我ら」は私たちの家族、友人のみならず、キリストを信じる者も信じない者も、一時も忘れることの出来ない敵をも含む。ただ私たちは、私を苦しめたあの人、この人を思って「我らの父よ」と祈れるのか？ 一時も忘れることの出来ない、あんなひどいことをした人を思って、「我らの父よ」と祈れるのか？・・・祈れない。多くの場合、人は祈れないはずである。しかし、ゆえにこの「主の祈り」は、共同体としての教会としての祈りなのである。キリストの十字架の贖いによって罪赦されたこの者は、これ以上ないイエス・キリストの代価によって赦された者であった。とは言え、ひどいことをされた者は、やはり許すことの出来ない弱さがある。「主の祈り」は、その「弱さ」を踏まえて、あなたの席のお隣の方が、あなたのために「主の祈り」を執り成してくれる。ゆえに共同体として、教会としてこの「主の祈り」はある。

この「主の祈り」は別名「弟子の祈り」とも言われる。祈りは人間側のものであって、祈りは鍛錬によって築き上げられるものであるという。確かに、祈りは多少の訓練は必要かも知れない。しかし、どんなにキリスト者が祈っているといっても、ユダヤ教徒やイスラム教徒の祈りには及ばないものであろう。まさに彼らの祈りのスタイルは、日ごろの鍛錬の成果であり、祈りは人間側のものとして捉えている。

では、私たちの祈りはどうか？「天にまします我らの父よ」という時、イエスご自身は、「天」の側か？それとも「我ら」の側か？どちらの側におられるというのか。今朝の箇所が、「山上の説教」の中にあることを踏まえて考えていきたい。(神谷武宏)